

一年半ぶりの北京帰国で感じたこと

外国語学研究所 中国言語文化専攻博士前期1年 王家銘

2023年、中国の入出国の制限が解除され、1年3ヶ月ぶりに帰国することができた。北京に戻って、以前から考えていた文献資料を調査するつもりだったが、帰国後数日でコロナにかかってしまい、準備していた仕事を一時停止せざるを得なくなった。しかし、ありがたいのは5日後に陰性となり、後遺症はあるものの、文献の調査には大きな影響はなかった。

北京で感じたこと——生活の面

1、久しぶりの「にぎわい」

2022年5月1日、ゼロコロナ政策の下で北京市は全ての店内飲食を禁止した。私はその翌日、天津経由で東京行きの航空便に乗り、封鎖直後の中国から「脱出」した。その後数か月間、スマートフォンを通じてロックダウン下の中国の状況を追い続けた。かつて人で溢れていた天安門広場は閑散とし、活気に満ちていた繁華街も休業や閉店になった。かつての大都市・北京が見せる光景は、まさに悲惨の極みと言える状態でした。



北京国安FCの巨大tifo

2023年8月、コロナが「終息」された後の北京に戻った私は、目の前の風景に微妙な「違和感」を覚えた。かつては人影がまばらだった天坛

公園が人であふれ、国家博物館は入場待ちの長い列、三里屯の繁華街は賑わいを見せ、これらの景象は最近の記憶にはないものでした。北京ダック店で二時間待ち、満席の北京工人体育场でのサッカー観戦、これら久しぶりの体験が私にささやくように、「あの活気に溢れた北京が再び戻ってきた」と。

2、久しぶりの「ラム食べ放題」

北京人にとって、夏にラムの串焼きを楽しまず、冬にラムのしゃぶしゃぶを味わわない年は、完全に損なわれた年と言えるだろう。日本での留学中、私は中国人が経営するスーパーで、新鮮とは言いがたく、しかも高価なラムを買うしかなかった。ラムの串焼きに至っては、もはや手の届かない贅沢でした。

羊肉料理への深い渴望を抱え、中国への帰国後、私は新型コロナウイルスに感染したにも関わらず、27日間で6回のラムしゃぶしゃぶと5回のラムの串焼きを堪能した。しかし、ありがたいのは、最近日本で新鮮なラムを購入できる店を見つけたので、今年の冬は遺憾なく過ごせるはずだろう。

資料探しで感じたこと―研究の面

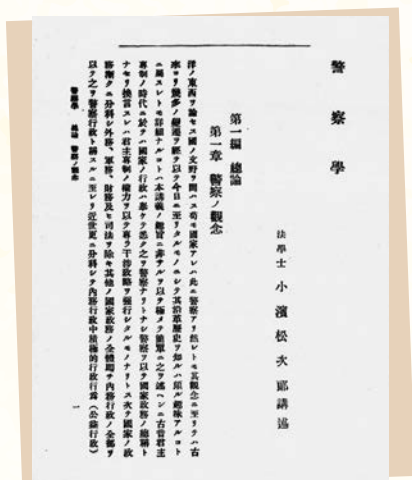
それから、中国社会科学院で研究している友人とともに、国家図書館や北京市の檔案館に行き、奉天地区の警察制度や教育の情報だけでなく、中国で警察が中心的な役割を果たしている北京や直隸地区の警察の事情も調査した。

まず、北京に戻って「奉天通志」に関する奉天警察の詳細な記録を調査し、「東三省政略」に関する警察の記録と重複する部分もあったが、奉天地区の警察が誕生した背景や設立の過程など、より詳細な情報が得られた。これにより、奉天地区の警察の背景研究に役立ったと思っている。



北京のラムしゃぶしゃぶ

次に、友人の助けを得て、檔案館での檔案の探し方や警察の檔案がどのようなカテゴリーに分かれているかなどを学び、警察の制度や運営の実情を理解するには警察学の知識が必要であることを感じた。その中で、私が最も注目したのは、麻薬取締りに関することである。特に1940年代、いわゆる中華民国維新政府時代の北京では、傀儡政権下であっても、警察による麻薬取締りの記録や、麻薬売買禁止に関する規定や法則が存在していた。これらの記録が事実かどうかを具体的に調べたわけではないが、そのような戦争の時代にこんな記録が残っているというのは、やはり一筋縄ではいかない事態だと言えるだろう。



小浜松次『警察学』講義のトップページ

この帰国を通じて、研究上での予想外の収穫もあり、学生生活には大切な経験となった。そして、グルメとして、日中両国の飲食文化の違いを体験することは非常に幸せなことだと思う。これからもし機会があれば、日中両国の飲食文化の懸け橋となり、日本の友人たちに最も本格的な北京料理を推薦したいと思っている。また、留学生として、日本と中国の文化の微妙な違いを感じることができるのは、非常に興味深いものであった。



北京市檔案館にある中華民国時代に関する展示会